



台湾北東部から本州沿岸に生息しています。
 このクラゲは、二色の浜に漂着していたのを、市民の方が持ってきてくれました。傘には16本の縞があり、強力な毒を持っています。
 自然遊学館にきたときは、傘の先がぱっくりと割れ流水水槽に入れても自分では動く気配はありませんでしたが、三か月たち傘の割れた部分も元通りにそして縞模様もつながり力強く動いています。
 毎日エビのすり身を与えると、40~50本ある触手(傘のふちから糸のようにのびるもの)にうまく絡ませて体内に取り込み消化していきます。一緒に水槽にいるスジエビモドキはクラゲが食べ損ねたエサをしっかりと食べてもう2回脱皮して大きくなってきました。一度クラゲがのんびりと漂う水槽を見に来てください。

自然遊学館だより

Vol.108 2024.6

6月7月8月の行事予定

- 6月9日(日)自然生態園作業と生物調べ(時間等電話で確認ください **申込不要**)
- 6月15日(土) **キジハタ稚魚放流**(二色の浜) (**受付** 6/1~6/12)
- 7月7日(日) **アマモ場の生きもの観察**(二色の浜) (**受付** 6/1~6/27)
- 7月14日(日)自然生態園作業と生物調べ(時間等電話で確認ください **申込不要**)
- 7月19日~9月2日 国立科学博物館巡回展「ノーベル賞を受賞した日本人」
- 7月27日(土) **水の妖精 プランクトン調べ** (**受付** 7/1~7/21)
- 8月3日(土) **せんごくの杜 夜の昆虫採集** (**受付** 7/7~7/26)
- 8月4日(日)「ミニミニ自然遊学館」(りんくうタウン駅近く)

りんくうプレジャータウンシークルにて展示&ワークショップを開催します

※ 夏休み自由研究相談 事前に電話を入れて時間を予約してください

QRコードからメールか来館された際お申込みください。申込み多数の場合は抽選になります。参加者全員の名前・住所(番地以下不要)・学生の場合学年を記入



ミナミハコフグ *Ostracion cubicum*
二色の浜打ち上げ2022年12月25日

二色の浜には驚くほどたくさんのが漂着します。そこには、人が捨てたペットボトルなどのプラスチックや生活に使った様々な種類のごみも一緒に流れ着きます。それとは別に、海の中で力尽きた生きものも打ち上がります。

この写真のミナミハコフグは和歌山県南部から台湾、インド洋など高い水温の場にすむ魚ですが本来いないはずの二色の浜で見つかりました。日本近海の水温は他の水域と同様に確実に上昇をしています。要素として¹⁾地球温暖化に加えて²⁾黒潮の海流の変化(蛇行)などが海水温に影響していると考えられています。ミナミハコフグも生育環境の広がりにより二色の浜近くまで来たのかもしれませんが。ここ数年チョウチョウウオ類等の南方系の生物も採取されています。大阪湾の生態系はどうなっていくのでしょうか。

ミナミハコフグの同定について協力いただいた和歌山県立自然博物館の平嶋健太郎氏にお礼申し上げます。

1) 海面水温の長期変化傾向(全球平均)(2024年2月15日気象庁) 2) 海面水温の長期変化傾向(日本近海)(2024年3月5日気象庁)

自然遊学館 YouTube



Facebook



ホームページ



行事申込メール



しぜん遊がくかん

貝塚市立自然遊学館
 〒597-0091
 大阪府貝塚市二色3丁目26-1
 TEL:072-431-8457



ツバメ *Hirundo rustica*

ツバメは、3月下旬～9月頃見られます。市街地や民家などでみられて、人通りが多い場所などに巣を作り繁殖をする姿を確認することができます。

人通りが多い場所などに巣を作るのは、天敵である、ヘビやカラスなどが人のいる場所に近づいていかないことをツバメが認識しているからだと考えられています。繁殖時期が終わると巣を使わず、南の国（アフリカ南部、インド、東南アジア・フィリピン・ニューギニア・南アメリカ）に帰るま

での夕方は、葦原に集まり集団ねぐらを作り生活をしています。まれに西日本で越冬する個体も確認することができます。

参考文献 五百澤日丸・山形則男・吉野俊幸(2014)「ネイチャーガイド 新訂日本の鳥 550 山鳥の鳥」文一総合出版

アリのようなハチ 貝塚市初記録の
ムカシアリガタバチ *Acrepyris japonicus*



ムカシアリガタバチは、アリガタバチ科の中でも大型の種で、体長が10mmほどです。本種が属するムカシアリガタバチ属は日本からは5種知られていますが、雌雄ともに見つかっているのは本種のみです。雌雄で形態差があり、メスは一見アリのような形態で、翅をもたず、単眼もありません。

写真は、2018年5月に岩崎拓氏がせんごくの杜の雑木林にて採集されたオスの標本です。その後、さまざまな手法で採集を試みたものの、雌雄ともに採集はでき

ておりません。

生態的には、コメツキムシのクシコメツキ属の幼虫に外部寄生します。外部寄生とは、一般的に寄主の体内に毒液を注入して麻痺させた後に、その体表に卵を産み付けます。寄生というのは、どこか映画「エイリアン」のような世界に感じます。

最後に、本種の同定に関して、ご協力いただきました三田敏治助教（九州大学大学院農学研究院）に深く感謝いたします。

キキョウソウ *Triodanis perfoliate*



ヒナキキョウソウ *Triodanis biflora*



キキョウソウは北アメリカ原産の帰化種です。高さ15～60cm、5月半ばごろ、キキョウを小さくしたような花を付けます。英名を訳すとヴィーナスの姿見といい、果実が熟すとがくの壁の一部がクルット巻き上がって穴が開き、そこから種が零れ落ちます。(上の真ん中の図)それが姿見のようだと付いた名です。

ヒナキキョウソウも北アメリカ原産の帰化種で、キキョウソウより少し早い時期から咲き始めます。キキョウソウとよく似ていますが、キキョウソウのように花を抱くように葉はついていませんし、茎一本に花が一つです。

どちらの花も道ばた、空き地、庭や芝生などに生えます。紫色がかわいくて、散歩の楽しみの一つです。 1) 『野草図鑑』P.69, 保育社



和泉葛城山のトウカイコルリクワガタ *Platycerus takakuwai*

和泉葛城山山頂付近には、文化財保護法上の天然記念物であるブナ林コアゾーンがあり、動植物の採集等はできません。私は、ブナ林の住人であるコルリクワガタを2020年から探し始め、2022年にコアゾーン内で初めて雌の生体を発見しました。それから2年後の今年、コアゾーン内で雌の死骸を発見、回収するか逡巡するうち風に飛ばされ見失ってしま

いましたが、その8日後、5年目にしてついにコアゾーン外で雌の生体を発見、確保できました。後にコアゾーンでは死骸の回収も不可ということを知りましたが、今後も、コルリクワガタとその生息環境の保全に留意しつつ、雄の発見に向けて探索を続けたいと思います。

(佐々木 仁)